

私の保育

湯本章子

「私の保育」について私がお話しできます内容は、本当に小さなごくあたりまえのことだと思えます。

それにしても「私の保育」ということばの何と重いことでしょう。ハッとして、あらためて自分をみつめなおし、保育のあり方をもう一度考えなおし、よかったのかしらとつぶやく、私もそのひとりでございます。

私の心もちからお話いたしますと、子どもに教えられて、きょうの日まで歩んできたと申せません。子どもと共にの生活が楽しくて、私の心の糧たぐひであったのひとにつきます。私が子どもによつて育てられている、私が楽しいことが子どもも本当に楽しい生活であつてくれるだろうか、私のわがままではないだろうか、教師という自分をおしつけてはいないだろうか、悩んだり喜んだりまたたく間に長い年月が過ぎました。くんでくんでもつぎな

い新しい泉のような世界、それはひとりひとりの幼児の限らない可能性と、ひとりひとりの個性が一日として同じ一日でない新しい一日の積み重ねであるからこそ、子どもに教えられ教師が育てられるのであらうと思えます。このように振り返りますと、やはり子どもに一番感謝し、お礼を申さねばなりません。私の経験はいずれも自然に恵まれ、自然を友として遊べる五十名から百二十三名までの小人数の幼稚園なので、ひとりひとりの子どもとの触れ合いが大変深まる生活であつたことを幸せに思つております。

昔、ふきのとうをみつけ、つくしを摘みに出かけた原っぱはゴルフ場が変わつて立入禁止になり、もんしろちようが群れ舞つていたキャベツ畑は住宅地に、田んぼもいつの間にか田んぼでなくなり、れんげの花も見えなくなりました。そのような周囲の変化の中で、年に何回か計画する園外保育と合わせて、子どもたちが外に広がった遊びの場で自然に接し親しみ、感じとつていく、そのような環境を大切にしております。先生が準備し整えることを、忙しさにまぎれて気づかなかつたり忘れたりした時も、園庭（園内）で接する自然、園をとりまく周囲の自然は忘れられることなく、いつもいつもその真実の姿を子どもたちに示してくれる、最も有力なそして確実な教師であり、友だちだからです。

「からだを低くして、目を地面につけて横から見ろらん、ホラ、芝の赤ちゃんが生まれてるでしょ」芝と同じ高さになって横から芽生えをみると、「ホントだ、小さな芽がいっぱい出てる！」柔らかい緑がもえていることを感じると、また赤ちゃんの芝はふむとかわいそう、芝が丈夫になるまでまわり道しよう、しぜんにそんな気持ちをおこします。冬、遊べるように、風ではこりが舞い立たないように園庭はころんで遊べる芝生の部分と、遊具が配置された土の部分とに分かれています。芝にまじってクロールバーが緑の葉を広げ始めると、まだ小さいうちから摘んで葉っぱだけの首かざりを作らせと作ります。ちょうど六月に入ると、白い花で腕時計や指輪を作って遊びます。五歳児は先生と一緒にむずかしい冠を作ったり、「作って、作って」とせがむ四歳児に作ってあげるのに追われます。摘んでも摘んでも摘み切れないほど、クロールバーは強くてふえます。芝生のところどころにできるクロールバーのかたまりは幅とび遊びの楽しさも与えてくれます。花吹雪を追いかけ、スキップをした桜の葉かげから、かわいいさくらんぼがのぞくのも六月、つつじのペンダントは母の日や年少組への素敵なプレゼントになり、園のいちごは小粒ですっぽくても、たったひと粒、ふた粒のデザートでも、「ありも食べていたよね」「おいし、よ」とにこにこし、砂場の日よけのぶどう棚の小さな

ぶどうの花がしたいに緑色のぶどうの粒に、やがてぶどう色に実っていくのを食べられるのはいつかいつか見守り、ひと房た房とわずかなぶどう狩にも眼を輝やかせる。サルビアの花を吸ってみて「ほくの好きな赤い蜜の花」といい、「ちょうちょになって赤いお花の蜜を吸うんだ」と園庭を飛び回る。このような子どもの期待にこたえたくて園内の自然環境を整えてきたといえます。

ペンペン草もメシヒバも猫じゃらしも除草してしまわないように、なつかしい昔の遊びを伝承したいと考えています。お父さんお母さん方からもご自分の出身地の幼いころの遊びを教えてくださいます。こんな幼稚園の姿を知ったお母さんから届けられた豆笛の草で、子どもも先生も夢中で豆笛を作っては鳴らした一日。

失敗もたくさんありました。

今年はどうしてバッタが少ないのかなと思った年は芝の手入れをしすぎたと気づいたり、種とりをしすぎてコスモスが絶えてしまったり、飼育箱でちょうの誕生をみるよりも自然の姿で青虫をみようよと、葉ボタンをいっぱい植えたのに、手入れが悪くて油虫がつき、菜の花に似た花もあまり咲かずに、青虫もつかなくてがっかりしてしまったり、たしかに自然は注意を怠ると一年待たなくてはならないことが多いものです。そしてこれらの環境は、園側の努力だけでは決して整えられず、家庭との協力が第一に必要な

です。いちごも花を持ち寄って植えていただいた何株かがふえた
ものですよし、ご父兄に園の方針を理解してもらわなくてはなりま
せん。子どもの生活の中でこれらの結果が目立って出てくるもの
でもありません。

秋の終りに園庭の落葉を拾って、遊んで、最後には毎日集めて
（二輪車のダンブカーごっこで）とっておきます。色水や染め紙で
遊んだ洋種山ごぼうも、じゅずごも、枯れすすき、萩や菊などだ
んだん枯れていきます。そして、花壇や庭園の整理をかねてする
落葉たきで、落葉のもえる匂いを知り、くすぶる煙を逃げ、やが
て焼きいもの匂いにつつまれて、おいもを食べる時「ここからお
いもはつながつてたんだね」といも掘りを思い出し、満足して食
べる一日。

どうして雪が降らないのか、雪国のニュースに「そっちばっか
り降ってずるいや！」といい、山の雪がほしいと初雪の丹沢に向
かってまっしぐらに広い高校校庭を走る子ら、両上りの山、霧の
晴れていく山に向かって「ヤッホー」と大声で呼びかける子ら、
「きょうは山がきれいだ」と春になってくる山を描きたくなる子。
その年その年によって、このすべてが経験できるわけではあり
ませんし、発見もおどろきもそれによる表現も違いますが、誰かが
気づき味わうと、ひとりの子の不思議が全体に広がっていく。そ

ういう積み重ねを大切にしてきました。

「おとうさんのどんぐりの木」の絵本をみて、どんぐりを埋めて
みる。立派に育ってその木も今年で五年生。「G君のお姉さんた
ちがさくら組の時に埋めたどんぐりがこんなに大きくなったんだ
よ」「えっ、じゃあこの木、四年生だよ、お姉ちゃん四年生だから」
などと話し合っってどんぐりの木と背くらべをした、どんぐり拾い
の翌日、「先生、ぼくね三つ埋めてみたんだ」「私も埋めたよ」の
子どもの声。「みんなが一年生になるとどんぐりも生まれるわよ」
「お水あげるの忘れたらだめだね」という子ら。冬の間は忘れて
いても、あたたかな日ざしを感じると園庭に出て、小さなほこべ
を探して小鳥の餌に摘む子、二年間の幼稚園の課程を修了するこ
ろの子どもは、にわたりの世話も禽舎の掃除も楽しみに進んでし
ます。先生の世話のしかたを見、一緒に手伝って、いつの間にか
小鳥当番をずつとやりたいといひ出す子、友だちの活動や行動を
よくみる機会を、場を努めて与えるようにしてきました。五歳児
の動作をみてきた四歳児もまた進んで行動する子どもにも成長する
であろうと思うのです。理屈ではなくおたがいの経験を通して、
子どもも先生も共に学びあい育ってきたと思っております。

（神奈川県立上溝幼稚園）